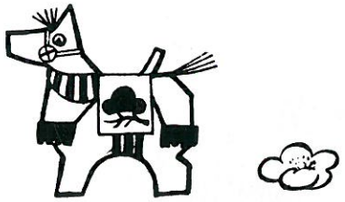
新年を迎えて

株式会社　丸　昌
穴　田　弘　二



新年を迎えて、私が思う事は、新しい年が、前の年よりも良い年でありたいと思うことです。でも、この新しい年が、円高不況という私達にとって、非常に暗い幕あけであると同時に、私が入社して、初めて立ち向かう苦しい年の幕明けである事が確かなようです。

今までは何でも売れて、呉服専業の私の会社は、不況と言う事を知らない。言わば、伸びて当然と言う時代でした。

私自身入社して、今まで味わった事のないきびしい年明けとなった今思うことは、

「努力」「誠意」この二つを念頭において商売にいどもうと思っています。

現在の呉服業界の一番の悩みは、消費者が和服よりも洋装の方に関心を持っている事ではないだろうか。

それは和服は価格が高い上に、着付けできる人が少なく、また、景気の低迷は消費者の心の中に必要な物だけでいいと言う観念を生じさせ着飾る楽しみを失なわせつつあります。そのあらわれが、商品の数量が売れなくなっている事です。

売上げ高は伸びていても、在庫が多くなり、非常に経営がむずかしくなってきていると、小売業者の方がたは言っています。

このように、何一つ取っても、むずかしい年明けとなった今、私が思っている事がすべて、うまく行くか行かないかは、私をお客様がどう評価されるかだと思う、そのためには誠意をつくして信頼を得る努力が求められる大切な時だと思います。

きびしい年を迎えて、私自身の成長を見る上で、非常に良い年ではないだろうか。

人間関係を大切にして、一歩一歩前進していくこの何とも言えない、むずかしくやりにくい年を私は、おもしろく、やりがいのある年にしようと思っています。

県特産物の殿堂を建設中

（協）石川県観光物産センター（理事長小川甚次郎）では石川県に於ける、伝統的工芸品を中心とする特産品産業をはじめ、銘菓、お酒、食料品等広範囲な物産を全国に紹介する為の殿堂を兼六園横の旧住宅公社跡に今年７月完成を目途に建設中である。

これまで、県内には兼六園内に明治時代から商品陳列館があったが、昭和22年に焼失したままとなっており、このあと、県特産品などを一堂に集めたところがなく、京都に次ぐ工芸特産県でありながら宣伝や紹介が遅れ物産館建設は永年の経済界の念願だった。館内には特産品を常時展示、特別展を随時開くほか、一部は即売する方針としており、これの完成により、県内特産産業の発展向上が期待されますので組合員各位のご支援をお願い致します。

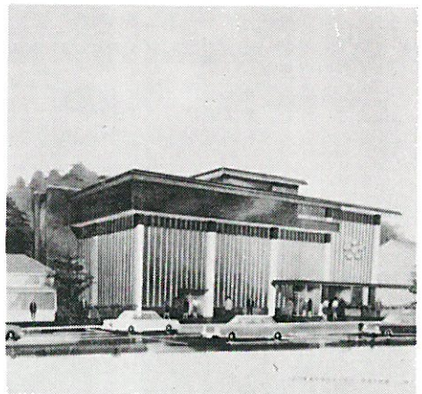
物産センターの概要

建設場所　金沢市兼六町15

敷地面積　1,018㎡（308坪）

建　　物　鉄筋コンクリート造地下１階地上３階
建延床面積2,028㎡（614坪）

利用計画　地下　展示即売コーナー（食品、菓子関係）
１階　展示即売コーナー（工芸品関係）、観光案内所、喫茶
２階　レストラン、茶寮、事務所
３階　特別展示ホール、常設陳列所、研修室、実演コーナー（加賀友禅、郷土玩具、金箔、桐工芸品、山中漆器、九谷焼、菓子、以上７業種）



完成予定図

協同組合 金沢問屋センター

第11号　1978年1月 発行
協同組合　金沢問屋センター
発行者　小　川　甚　次　郎
金沢市問屋町１丁目
電話３７―８５８５

―業界の先駆者として誇りと識見を―

協同組合　金沢問屋センター
理事長　小　川　甚　次　郎

昭和53年の年頭にあたり、謹しんで新春のお慶びを申し上げます。

昨年は長期に亘る不況の影響を受けて、各企業におかれましては苦しい１年間で、しかも円高という、かってない厳しい深刻な経済環境の中にありながら、全企業147、関連企業10社共、１人の落伍者もなく、昭和53年の新しい年を迎えることができましたことは、皆さまと共に喜びに堪えないところであります。

政府は53年の経済成長率を実質７％を目標に予算を編成し、あらゆる景気回復策を打ち出しておりますが、そう簡単に、この景気が回復するとは思われません。

こうした経済環境の中では、お互いに企業の体質改善強化を一属進め、低成長下にふさわしい、強固な経済基盤を確立していかなければならない年だと痛感する次第であります。

当団地も昨年は完成10周年を迎え、これを一つの節として、今後共団地創立時の初心を忘れることなく、更に固い団結と相互扶助の精神のもとに、努力を重ねられ業界の先駆者としての誇りと識見を持った、北陸地方における中核的な商業団地として発展して行きたいと思う所存でございます。

最後に皆さまのご健康とますますのご隆盛を祈念いたしまして、私のご挨拶といたします。

'78 新年互礼会盛大に開催!!

恒例の新春をかざる金沢問屋センター新年互礼会は1月4日午後2時、問屋会館大ホールに於いて、奥田敬和衆議院議員、嶋崎均参議院議員、安田隆明参議院議員、中西石川県知事、江川金沢市助役、宮太郎商工会議所会頭、中島、北村、渋谷氏を三来賓にセンター商社150社の役員参席のもとにひらかれた。

まず小川理事長より〝昨年は長期の不況にみまわれたが、皆様の努力と団結により157社、1社の落伍もなく進展の一途をたどった事は同慶にたえない。本年度政府の7%成長発表による、いろいろな政策を打出しているが、ここにさらに、個々の企業の努力と集団化による明を発揮せねばならないとの挨拶のあと、来賓各位より、それぞれ〝人の和を中心とし、力を合わせ、運営されている問屋センターに敬意を表する（中西氏）、〝今年も試練の年であり、一致結束、質的充実の守にしてほしい〟（宮氏）、

団地の歴史も10年、企業にも、国にも、歴史があり、明暗がある、この明暗をさばくのが今年度成長率7%とであり、34兆にのぼる明るい撰択である。団地は和と団結により英知と友情の結束をさらにかため、53年を堅実な発展の年にしてほしい、（安田氏）、それぞれ祝辞を受け、開宴にうつり三廓の美妓による初舞に酒をくみかわし、今年の問屋センター、組合員各社のますますの発展をお互いに約し、今井県議の力強い万才三唱にて、盛況の内に終了した。

新 春 《初詣》

互礼会に先だち、4日1時半より、新春初詣が問屋神社奉賛会々長小川甚次郎氏はじめ、各社々長役員多数参加のもと、問屋神社に於いて行われ、本年一年の協同組合問屋センターの発展と各社の隆盛が祈願され、1978年の出発をかざった。

"53年迎春初市"

繊維同業会

繊維同業会恒例の初市は、1月の6日7日の両日、各会員の店頭を会場として、活気あふれる取引が行なわれた。今年は例年に無い素晴しい天気が続き、春物や防寒の紳士、婦人寝具、子供、和装小物、呉服等々不況の風を吹き飛ばすかの様に、エネルギッシュな売込が行なわれた。

今年の傾向として川上の長期的な減産から起る売筋商品の不足、地域的販売シエアを持つ商品に、全体的見地からの生産カット、プロパー商品に対する輸入品の拡大（完成品、半完成品）等々、川上は実情から来る価格の変動、商品のストック減し、川中・川下のニーズの情報収集に非常にシビアになるだろう。

これに対して川中では、ファッション性のある商品では素早い変化の把握、商筋商品に対して数量の確保が、川下に対して使命となるだろう。又ファッション性の少い商品や季節商品は実情から動向が鈍く、在庫調整が急務となっている。又輸入品のパーセンテージから来る価格動向も見逃せない所である。

川下では顧客のファッション性商品に対する考えかたが、巾広く、バラエテイに富んでおり流行をうまく取り入れた個性的コーディネイトのレベルアップからファッションを売る店はより専門化していく傾向にあり、ブデイック調の店が増えている。

ボリウム商品を扱う店舗は、より大型店と地域的に密着した店に二極化して行くだろう。又輸入品の技術アップから来る国産品との品質価格の比較、検討が急務になっている。

今年の現状は数年来の大手紡織の原糸・原反の生産調整も進み、市場も仮需要が出て来つつあり、景気動向も少しづつ明るく上向きになって居る。

昭和52年度 晴れの受彰者

共栄電機株式会社
共 栄 商 会
社 長 高 桑 清

52年11月3日　勲五等瑞宝章

電気商業関係団体の役員として、永年に亘り業界の発展に寄与した。

石繊株式会社
社 長 山 田 治 男

52年3月30日　藍綬褒章

永年に亘り広域商業地域の調整につとめ、商店街の近代化、協業化育成に尽力するなど、地方中小企業の発展に貢献した。

私の趣味

石仏 ②

丸与商事株式会社
林　信一

了願寺「アザ地蔵」

石仏趣味というと、信仰を冒瀆するようで、まことに失礼であるが、京都に次いで寺の多い金沢市内では、どの寺院（浄土真宗を除く）でも、境内の片隅に、二、三体の石仏のないところはない。石仏には、金銅仏や木像のような高度な芸術性はないが、庶民の信仰や願望を秘めた点において、もっとも、私達に身近かであり、親しみ易い。その由来を通じて、民衆の生活の一端にふれることから、趣味が生れるのかも知れない。

数年前まで、石仏ブームが盛んで、石仏に関する出版物も多く、私も日曜毎に腰弁当で、金沢市内や加南の山野を遍歴して、珍らしい石仏にめぐり会うことを、唯一の楽しみとしていた。ところが、目当ての石仏にめぐり会っても、それが、石仏とは全く無縁な場所に、しかも立派なお堂にまつりこまれているのを見て、がっかりしたものであった。石仏は、やはり野仏として野に置くべきものだとつくづく感じた。

ちょっと、風変りなところでは、天神橋を渡った卯辰山の登り口に、了願寺という浄土宗の一刹があって、その境内に身丈二米もあろうかと思われる延命地蔵像がある。その来歴を見ると、昔奥州街道にあったとも言い、浅野川の上流から流れ着いたとも書いてあるが、そのお顔の真中に、カルタ大の褐色のアザのあるところから、「アザ地蔵」とも呼ばれている。そうした不純物のある石材を、お顔の真中に選んだ石工のユーモラスな手巧に、微苦笑を禁じ得ないが、そのアザの由来が、面白い。

昔、乱暴な男がいて、お顔に馬糞を投げつけたのが、アザになったとか。また、顔のアザを悩んだ女性が、地蔵さんに願かけしたところ、その醜いアザがとれた代りに、地蔵さんのお顔にそのアザが残ったと言う。慈悲忍辱を説く地蔵物語の一つであるが、特に地蔵さんには民家の生活と深いかかわりを伝えるものが多い。

年男大いに語る

午年に想う

玉田商事株式会社
社長　越田　春男

最近世の中が何如か乱れて信義が薄れて来た様に思えて仕方がない。

世界中の国々が、自己の利益の為めには、国際信義もかなぐり捨て、又、主義主張も朝に夕に、目廻ぐるしく変わる今日此頃である。遠くには昭和20年夏の日ソ不可侵条約の破棄、近かくは北方領土の一部返還を約した田中・ブルジネフ共同声明取消しのソビエト、儒教を否定し政敵を排除したかと思えば又々それを肯定し学問を政争の具に使用した中国等、国際的な物から、国内的な物では共産党の暗黒思想、同志と呼ばれる者すら、信頼出来ない集団、片や左右に別れ意義の無い内紛を続けたり、市民を裏切り田舎芝居をしながら駄々をこね、揚句の果てに党委員長の座を獲得した大根役者を有する社会党、ロッキード事件、日韓汚職、インドネシヤＬＰＧ疑惑問題を抱える有史以来の汚点を残した自民党、ぬるま湯的な民社党、災害時の治水には利用しながらも認めず、世論の必要性が高まると御都合主義的に自衛隊を公認した公明党、いずれを見ても、国民が信頼して行けそうな政党も見あたらないのである。

政治的分野もさる事ながら、アニマル振りも一段と冴えて来た商社群の悪徳振り、儲ける事なら水火もいとわぬメーカ等、国民には迷惑の掛けっぱなしの前科日本株式会社、政治献金や私利の為には馬鹿でも入学させる私大医学部等、人間倫理の道を踏み外した事ばかりで有る。

かの石川五衛門の迷言、「浜の真砂はつきるとも……」ではないが、犯罪は世の乱れと共に繁殖し、昨今の犯罪の頻繁性は最早や理性では考えられない様なおぞましい世の中である。

この世を正しく明るく美しくするのは政治家でもなければ、役人でもなく、我々一人一人の国民が、自らを正し、悪に立ち向って行く勇気と行動力と情熱である。

本年は午年で有る。午は本来十二支の第七番目、中心であり、方角的には君子南面すの南で有り、時刻の中心で午前12時でもある大切な役割りを持つ干支である。

馬に纏わる童話、昔ばなし、物語りには人情物、愛情物が多く、如何に情の細かい動物で有るかが窺われる物であるが、大人しくやさしい半面、怒り出したら手のつけられない生物である。

どんな荒馬でも扱い方によっては名馬にもなり、如何に駿馬とは云え乗り手によっては駄馬ともなる本来は従順な動物である。

この馬に因む本年こそ、働き盛りの優秀な政治指導者を得て国民がその指導者のもとに正しい道を翔け抜ける天馬の年にしたい物である。

昭和の夜明け

株式会社　堀川商店
専務　堀川　善昭

年が明け元旦のＴＶを見ていて始めて午年であることに気付き、自分の年を再認識した次第である。自分にとってこの12年は真に貴重な期間であり、多くの社会経験をしたものだと追想したのである。特に問屋センターへの進出、父の病気が自己のトレーニングを予儀なくさせられ苦しかった中にも感謝しているのである。今回も年男の発言の場を与えられたのを機会に初戯言をほざき、先輩諸兄の御批判を賜うれば幸に思います。

本年は雪こそないが、絵にかいたボタ餅の如き大型予算ばかりで、はっきりとした経済見通しもない暗い年明けを迎えたのであるが、ここ数年この言葉は言い古されたのではなかろうか。この局面を乗り切るのは我々の父達も経験のないことであり、自由奔放なる発想の転換のうちからその糸口が見い出せるのではないだろうかと思います。例えば自分をも含めた戦争を知らない若い人口が過半数に達し多様性を持った価値感の持った国内消費者構造、情報が瞬時に伝わる国際社会等を認識することから始まるのではないだろうか。自分の業界を見ても貿易を通じて、メーカー段階においては早くから構造改革がなされてきたが、我々の流通段階は今からなされようとしている。小売店段階においては、量販店と称する大資本の進出が見られるが、流通システムの内容においては先進国のそれと比較すると未だという感じである。今後流通チャネルの主たる担い手が彼等になり彼等同志の競合激化時代に入れば当然その内容も変革をきたすことは自明の理であろう。その時には我々はそれに対応する力を持っているだろうか。最早や彼等とは資本力、組織力の点では格差がついているかもしれないが、それをうめるのは個々の努力による力だけではなく「協同の力」であると思う。ややもするとメリットのみ追求し、そこから派生するリスクは拒否する体質のある日本において、協同組合活動は根気のいることかもしれないが、是非共このメリットを得ながら生き残りたいものである。「問屋センターさん頼りにしてマッセ」